

## ポストコロニアル・フェミニズムとナショナリズム： プエルトリコ女性たちの辿った歴史、経験の記憶

三宅 (志柿) 禎子

### Post Colonial Feminism and Nationalism: Experiences of Puerto Rican Women in the US and Puerto Rico

MIYAKE-SHIGAKI, Yoshiko

In Puerto Rico, the women started to keep their distance from the divisive political issue of the island's status as a US territory when they united to address women's issues. This has caused the established parties to rethink their politics and also has accelerated the argument objectively about the island's political status. Meanwhile, in the US, the influence of Puerto Rican women is felt in grass roots movements and in women of color movements. They have added their Latina perspective to the mainly white middle class American feminist movement. Also, with their different circumstances and concerns, they are a new addition to the Puerto Rican national identity.

Both on the island and in the mainland US, Puerto Ricans are creating a new paradigm in politics. Their movement is growing rapidly in the group of minorities in sovereign nations and in feminism on the outskirts of a sovereign nation. We can recognize the case of Puerto Rican women as one of post colonial feminism.

私のことを、思い出すのではなく感じてほしい／あ  
なたの愛と私の魂の間にあるのはトリル、震える音の  
ひびきだけ・・・

私のことを、思い出すのではなく感じてほしい／私  
のことを考えるのをやめるほど、それだけ私を愛する  
ことになるのだから "Canción hacia adentro", Julia de  
Burgos, *El mar y tú*)<sup>1)</sup>

#### 1、周縁に切り捨てられた者のことば、フェミニズム の視座

ポストコロニアリズムの尖鋭理論家として知られる  
トリン・T・ミンハ (Trinh T. Minh-ha) は、1989年  
に出版された著書『女性・ネイティヴ・他者』で次の  
ように語り始める。

「昔むかしに始まった物語・・・その物語は本当の

ところ、始まってもないし、終わってもいない・・・  
その起源は、はるか昔一群の力の強い男たちが、自  
分たちを真ん中の支配の座にすえて、・・・自分たち  
が特別の場所を得たという手柄をことさら強調し、自  
分たちの集団から外れているとみなす者には押し付け  
がましい態度をとり、自分たちの考えのなかだけにく  
るまり、内にいる者と外にいる者の両方の精神を語る  
のだと言いながら、いつも内にいる者の理屈だけで外  
にいる者を解釈してきた。」<sup>2)</sup>

ポストコロニアリズムのフェミニスト理論家として  
有名なトリンは、権力の側から一方的に行われる解釈  
という行為に疑問を投げかけ、周縁に位置する者の対  
場からその主張を展開した。そして、アジア人女性で  
あり、作家、映像作家であるという自らの経験から導  
きだされた感覚を、ポストコロニアリズムにおけるフェ

ミニズム理論に昇華し提起した。また、さまざまな文化が融合するハイブリッドの視座に依拠し、支配する側からカテゴリー化されることを拒み、「差異」を無限に保ち続け、人を区分する境界をあいまいにすることを提唱した。西洋対東洋、マジョリティに対するマイノリティといった二項対立的な発想を拒み、各人が保持するさまざまな側面をそのまま受け入れることを提起する。

それは例えば、自分が「マイノリティであるアジア人女性のフェミニスト」と区分されたときに生じる、何かが違う、という感覚を思い起こしてみれば理解しやすいかもしれない。カテゴリー化されたたとんに常に生じるありのままの自分との違和感。ただし、その違和感を表明するためには、言語化からすり抜けていった齟齬の部分を顕在化させるために自らの声を模索するのと同時に、支配する側からの解釈を逃れなければならない、という離れ業も必要とされる。なぜなら、発した声が、支配する側の言葉で解釈されたたとんに、支配する側の現実となってしまふからである。つまり、ところ、トリンの思想は、真実は語られる者の視線によって異なる事実となっていくという複雑な問題を抱えたまま、いかにして周縁に位置する者の現実を可視化させるのか、そしてそのために、誰がどうやって声を出していくのか、ということに対するひとつの回答を提起したとも言える。周縁に位置する者の現実を葬り去らせないためには、声を発し、存在を可視のものとする必要があるが、同時に、解釈を与えられれば、その解釈に疑義を差し入れ続けなければならない。永遠に続く異なる差異化の作業が、与えられた解釈に対する抵抗のひとつの手段である。スピヴァクの「サバルタンは語るができない」という主張<sup>3)</sup>が模索するものと共通するものがある。

また、トリンは、

「言葉は、時代を経るにつれて、からっぽになっていく。死に絶え、また現れ、そうして新しい意味をまとい、いつもまた聞きの記憶を身に帯びていく。女は何かを言おうとすれば、自分を切れ切れに裂いて不透明な言葉にし、自分の声は沈黙という壁に塗り込められないと言われる。・・・いかに多くの女が、主人の道具を借り、そのために主人の掌のなかだけで踊っていることとなって、早まった死を宣告されてしまったか。」<sup>4)</sup>

と嘆く。

言葉によって語られる概念は支配者によって形作られてきた。トリンは、その社会のなかで言葉を持たない者が、自らを可視化させるために主人の道具(ことば)を使用することで絡められる危険を察知し、同時に、自分たちが存在する現実を可視化させていくことの重要性も肯定する。その矛盾にこだわりながらも、中心とは異なる文化に位置する自らの空間とそのありようを肯定すること、それを無限に続く差異化としてトリンは主張した。この思想は、1985年に出版されたD. スペンダーの『ことばは男が支配する』を思い起こさせる。スペンダーは言葉というものが、権力側の男の都合の良いように働くことを実証した上で、次のように不可視部分の女の潜在的な力に期待を寄せている。

「男たちは、・・・男たちだけの現実に関じ込められているのではないだろうか。・・・私が女には潜在的な力があると考えるのはこの意味においてである。女たちは、無言集団としての経験によって得た広汎な意味へのアクセスをもっているのだから、それを利用すればよい。女が支配集団になってはだめだと考えるのもこのためである。支配集団は誤った意味の発達を促す。末端にいる者のほうが生産的な場合もある。」<sup>5)</sup>

力の中心から切り捨てられた者のみが気づくことができる現実を可視化する力を女たちが持っている、とスペンダーは言う。そして、トリンは、支配する者によって形作られた言語を使用しながら、周縁に置かれた者の存在を言語化する際のあやうさを認識すると同時に、その力を力として具現化し、支配の中心に埋没してしまわないために、「〈差異としてのジェンダー(gender-as-difference)〉という物語は・・・変異しつづける物語」<sup>6)</sup>という「無限に押し進める差異化」<sup>7)</sup>の概念を提唱した。それは、スペンダーが期待した周縁にある者の潜在的な力が、示されたことでもある。ただし、トリンが、周縁に位置する者の空間を言語化する場合に、スペンダーの言う「無言集団」の女とその範囲が一致しないことは想像に難くない。

また、このトリンの概念は、メキシコ系アメリカ人女性であるチカーナ、グロリア・アンサルドゥーアの『ボーダーランズ/ラ・フロンテラ』の思想の影響

をも感じさせる。トリンの『女性・ネイティブ・他者-ポストコロニアリズムとフェミニズム』の記者である竹村和子は次のように記者あとがきで述べている。

「『一つの文化から別の文化へ絶え間なく移動を続ける私、一度にあらゆる文化のなかにいる私』の『境界空間での闘争』というアンサルドゥーア思想は、何らかの形でトリンの『理論化』に示唆を与えただろうと思われる。・・・『わたし』の場所を差異化しつづけるトリンの理論／詩は、『境界空間』という語でもっともよく説明できるものと言えよう<sup>8)</sup>」

トリンの理論が、突然、何の前触れもなく現れてきたものではなく、それまでのフェミニズム理論の深化のなかから生まれてきた思想であることが分かる。

## 2. 米国マイノリティ女性とトランスナショナル・フェミニズム

ところで、『ボーダーランズ／ラ・フロンテラ』が出版されたのはトリン・T・ミンハの『女性・ネイティブ・他者』刊行の二年前、1987年のことである。この著作によって、文化の交錯する境界地域のメキシコ系アメリカ人女性たち、チカーナの経験がポストコロニアリズムのひとつの重要な理論として提起されることになるのであるが、著者のグロリア・アンサルドゥーアは1981年に編者として、*This Bridge Called My Back: Writings Radical Women of Color*<sup>9)</sup>の刊行に携わっている。『ボーダーランズ』の前身ともとれるこの著作で、アンサルドゥーアたちは、アメリカ女性の周縁部分に位置する黒人女性、アジア系アメリカ人女性、ラテン系女性、ネイティブアメリカ人女性を *women of color* としてとらえ、その連帯を打ち出した。トランスナショナル・フェミニズムの視点がアメリカのフェミニズムの周縁に位置する者たちの側から提起され始めていたことが分かる。アメリカ女性たちの周縁部に位置する女性たちの *women of color* としてのフェミニズム、更に差異化を深化させる形で打ち出されたアンサルドゥーアのメキシコ系アメリカ人女性、チカーナとしての国境を超えた第三世界のフェミニズム、これらの提起が米国において成されていることは、フェミニズム全体がフェミニズムと複数形で表現されるようになったフェミニズム全体の潮流と一致している。この点も興味深い。アメリカ合衆国のなかでの

フェミニズムの多様化は、地球規模でのフェミニズムの進化と密接に関連していることが窺える。

周知のことであるが、1975年のメキシコで開催された世界女性会議で発せられたラテンアメリカ・カリブ地域の女性たちの欧米フェミニズムに対するブルジョア批判は、その後、双方の世界でフェミニズムの盛り上がりとそれぞれが持つ運動全体の視野の広がりとともに、フェミニズムの多様性を生み出した。それは、フェミニズムの分裂ととらえるより、深まりとして把握すべきものである。いみじくも、米国内のヒスパニック女性は、米国フェミニズムの中心にある白人のフェミニズムより第三世界の女性たちのフェミニズムに呼応連帯し、その視点を米国内のフェミニズムに持ち込む、と指摘される場所であるが、そのような動きが、米国内のフェミニズム、さらにはラテンアメリカ・カリブ地域全体のフェミニズムの豊かさを生み出していると言える。

1984年に『ブラックフェミニストの主張』を執筆したベル・フックスは、冒頭で「アメリカのフェミニズムは、性差別の抑圧で最も犠牲になっている女性たちから立ち現れてきたことがない。」<sup>10)</sup>と述べ、フェミニズムの言説を支配する白人女性のフェミニストたちを辛辣に批判した。しかし、それは、「フェミニズムの闘いを矮小化しようとしているのではなく、むしろ豊かにすることを求めている」<sup>11)</sup>とも述べ、周縁に位置する女性たちのフェミニズムにおける重要性を主張している。周縁に位置する者が声を発してその存在を可視化させていく働きが、フェミニズムの持つひとつの力でもあることを考えるとき、その力が効を発し、もともと潜んでいた女性間の多様性が浮き彫りになった、ということでもある。それは、フェミニズムを後退させるものではなく、可視化されていく多様な現実を前に、新たなフェミニズムの動きが形成されていくことにつながる。

これらの米国内に見られる *women of color*、トランスナショナル・フェミニズム、チカーナの境界線上のフェミニズムとは、特権化した主権国家の周辺地域、あるいは、主権国家内のマイノリティ集団において急速に勢力を拡大するフェミニズムとして今後さらに発展していく可能性を秘めている。そして、プエルトリコ人女性たちの経験も、脱植民地化が未完成の社会におけるフェミニズムという点において、ポストコロニアル・フェミニズムのなかで位置づけなおすと、その

存在と意義がいっそう鮮明になってくる。

### 3、米国本土におけるプエルトリコ人女性たちのフェミニズムの動向とナショナル・アイデンティティ

米国におけるプエルトリコ人移民女性たちは、移住当初からタバコ製造業や繊維産業の分野で重要な稼ぎ手となってきた。また、70年代以降、ヒスパニックに対する福祉政策を求めた社会運動、公立学校でのバイリンガル教育プログラム設立運動、大学でのプエルトリコ研究組み込みの運動などでも女性たちは常に重要な役割を果たしてきた。

しかしながら、これまでの調査から、アメリカ合衆国本土には、プエルトリカン・フェミニズムと捉えられるような運動は存在せず、フェミニストの異なるグループが散在しているにすぎないことが明らかになった。プエルトリコの女性たちは、国家レベルではなく、州やコミュニティのレベルで活動しており、しかも、活動分野は、健康、教育、環境など多岐に渡っている。しかし、黒人でもなく白人でもないプエルトリコ人としてのアイデンティティのもとに、日常生活改善や草の根運動のレベルで活発に各分野で活躍し、その存在を顕在化させた彼女たちの活躍は、ラテン系女性の中でのプエルトリコ人女性という存在を浮き上がらせ、マイノリティ女性たちのフェミニズム内部に多様性をもたらしている。その活動は、他のマイノリティ住民とともに、それまでに存在した、白人と黒人からなるアメリカ合衆国、という認識を変更させていく重要な勢力を形作っている。また、他のラテン系女性たちとともに、women of colorの一翼を担い、アングロサクソン系アメリカ人女性のフェミニズムに欠落しがちなマイノリティ女性や第三世界の女性たちの視点を持ち込み、フェミニズムの質の転換を求める勢力としても重要な役割を果たしている。<sup>12)</sup>

プエルトリコ人女性の運動がプエルトリカン・フェミニズムという形をとらない理由は、米国本土に広まって居住し、それぞれが連絡を取って活動しているわけではないという地理的理由もさることながら、それ以上に、彼女たちが直面する問題が、プエルトリコ人特有のものというよりも、米国本土に生活するマイノリティ全体の抱える問題と共通する面が強いということによる。従って、地域で他のマイノリティとともに活動する、あるいは、権利獲得、生活改善などの課題に、他のラテン系女性たちと共闘するといった活動が多く

なるのである。

それでは、プエルトリコ人女性たちのこのようなマイノリティとしてのフェミニズムは、プエルトリコの政治の焦点である植民地問題、および、ナショナリズムの問題にどのような影響を与えているのであろうか。

米国本土でのプエルトリコ人の女性たちの存在が、マイノリティ女性の中に多様性をもたらしているのと同様に、植民地問題についても、プエルトリコ人コミュニティ自体の変化と密接に関連性を持ちながら、ナショナリズムのありように変化をもたらしている。<sup>13)</sup> 島とは異なる米国での経験が、島政治に対する見方への変化を生み出し、そして、米国内でのマイノリティとしての経験から生まれたナショナル・アイデンティティはその経験に基づくもので、これもまた、プエルトリコの島の住民が持つものとはその様相が異なる。

ニューヨーク州立大学のEdna Acosta-Belén教授は、米国本土に住むプエルトリコ人のアイデンティティが、米国本土で生まれ育った者が半数以上を占めるようになった現在では、エスニックやマイノリティとしてのものであることを含めて多様化していることを指摘し、そこにはイコール反米ということの意味せず、アメリカン・ドリームや民主主義、経済的豊かさの肯定を含む意識があることを筆者に指摘した。<sup>14)</sup> その指摘は、直接、プエルトリコの州制移行などの政治問題に言及するものではない。また、独立主義を批判するものでも州制移行を主張するものでもない。しかしながら、米国本土のプエルトリコ人たちに、プエルトリコで常に問題とされる州か独立かといった選択とは異なる視点が存在することを筆者に印象づけた。それは、筆者が米国本土に居住する研究者や地域活動家にインタビュー調査を実施して回るときにときおり感じるものである。独立を主張するグループの話ですら、それは、プエルトリコの独立をめぐる論争とは内容が異なる。米国本土に暮らす経験のなかから生まれたプエルトリコに対する政治的見解は、そこでの生活のなかでの特有のものに変質していくようである。米国本土で耳にするプエルトリコ独立の主張は、具体的な独立の政治的道筋を語るというよりは、異国の地でのアイデンティティ確認の手段として、或は、そのためのナショナリズム高揚としての色彩が強いことに気づく。プエルトリコでは経験しない差別を米国本土で経験するために、米国本土に在住するプエルトリコ人たちは、プエルトリコ以上にナショナルスティックになる、だからより先

鋭な独立主義者が多くなる、とシカゴに住むプエルトリコ人が筆者に語ってくれたが、それはプエルトリコで耳にする、どのような政治的形態がプエルトリコの人々に豊かな暮らしをもたらすのか、といった論争とは別個のものである。

このように、米国本土に存在するナショナリズムには、その立場の相違から、プエルトリコとは異なる側面が見受けられるが、それは、ある意味で当然のことでもある。一方、フェミニストとのインタビュー調査では、トランスナショナリズムという概念を用いて自分たちの立場や活動を語る場面に遭遇することがたびたびあった。他のラテン系女性たちと活動することの多いプエルトリコ人女性は、その経験からトランスナショナリズムのフェミニストの影響を強く受ける。その女性たちのなかには、プエルトリコの植民地問題をめぐるナショナリズムに対して懐疑的な見方をする者もあった。ただし、プエルトリコ人コミュニティでは、ナショナル・アイデンティティを確立することと独立主義とが結びつく、或は知識人としてのパスポート的存在として独立主義が存在してきたために、表立って批判することを避ける傾向が存在する。しかし、それも今後は、徐々に変化し、プエルトリコの言論界において既に開始されている国民国家概念の相対化に、更に拍車をもたらしていくものと思われる。また、さまざまな諸要因が複合的に作用し合う中で、プエルトリコ人コミュニティ地域に支配的であった独立主義指導の政治活動にも変化が生じ始めており、それが更にコミュニティ内のナショナリズムのあり方に変化をもたらしていくものと考えられる。

プエルトリコとは異なる環境に生きる米国本土在住のプエルトリコ人女性は、その経験や生い立ちの違い、また、地域での生活改善の運動の過程などで、そのナショナル・アイデンティティも現実に見合った多様なものに変容しており、それがこれまでのネイション、ステイト、アイデンティティの概念に新たな視点を提供していると言える。

#### 4、プエルトリコにおけるフェミニズムの動向と既成政党政治のあり方

一方、プエルトリコでは、米国本土とは異なる形で女性たちの経験がこれまでの既成政党政治に新たな視点を提供した。

プエルトリコでは、50年代以降のプエルトリコ社会

の工業化社会・消費社会への移行とともに、女性の高学歴化と経済的自立が進み、女性たちを取り巻く環境が大きく変化した。この急激な経済成長とともに女性の社会進出が拡大し、女性運動の下地が徐々に形成された。70年代に入り、アメリカのフェミニストのリーダーとして注目を浴びたグロリア・スタインナムがプエルトリコを訪問し世間の耳目を集めた。また、女性問題は存在しないとされた政府の女性問題調査報告を契機として大論争が起こり、フェミニストグループの活動が一挙に活発化した。その後、その運動に刺激される形で既成政党も女性問題の解決に勢力的に取り組むようになっていった。70年代半ばには、活発化した女性たちの運動の勢力を集結しようとプエルトリコ女性連盟（Federación de Mujeres Puertorriqueñas）が結成された。しかし、この組織は期待された女性運動の連合体としての力を発揮することはなく短命に終わってしまった。内部に政党の党派主義が持ち込まれ、組織は混乱し、解散したのである。この時期、フェミニズム勢力に影響され、政党が女性差別撤廃を掲げ、社会のさまざまな面で性差別撤廃が政策として推進されたが、これとは対照的に、女性運動内部では、プエルトリコの政治的地位をめぐる対立が持ち込まれ、多くの組織が分裂し消滅していった。この時期、フェミニズムが社会的には勢力を増しながら、プエルトリコの植民地問題をめぐる対立によって運動組織が解体していく、という皮肉な経過を辿るのである。

しかし、この70年代の苦い経験のあと、フェミニストたちは、大きな政治組織ではなく、女性の健康を考えるグループ、ドメスティック・バイオレンスの被害者用シェルター経営などの個別課題を解決する小さな組織を再結成し始める。80年代後半には、それらのグループが協力し、ドメスティック・バイオレンスを犯罪とする法律制定に向けて、行政側の女性たちとも連帯し、大きな運動をつくり出し、89年に法制定にこぎつけた。個別課題に取り組むそれぞれのグループがひとつの利益課題に対して協力し、行政に圧力をかけたのである。連帯にあたって、フェミニストのグループは、行政側の人間、研究者らとともに連絡協議会を結成し、組織的に運動を推進していった。この形態は、それぞれのグループが、暴力に反対する、労働者の問題を解決する、健康知識を広める、といった個別の課題に取り組むグループの連合体であったため、特定政党のイデオロギーが内部に持ち込まれ、政党に直接引

き回される危険性を回避することができた。そして、個別問題に活動の目標を絞ったそれぞれのグループが一つの利益課題に対して共闘するという従来見られなかった運動スタイルを生み出した。このような動きは、植民地問題を中心に対立を続けていたそれまでの既成政党では女性問題に対応できないことを印象づけ、その政治のあり方に変更をもたらした。もちろん、70年代の苦い経験を経た女性指導者たちが、党派主義をフェミニズム内部に持ち込まれるのを極力避けた、という点も重要な要因となったことも見落としてはならない。

つまり、プエルトリコでは、女性問題解決に向けて女性たちが連帯することを最優先し、既成の政党政治の在り方に対し距離を置くようになったのである。それは、この運動を担った女性たちが、州制移行や独立主義そのものに対して懐疑的になることを意味しないのだが、この問題を女性問題の場に持ち込むと、混乱が生じることを自覚した指導者たちが、あえて、女性問題解決の場にこの対立を持ち込まないよう努力し、女性たちの力を結集したのである。そして、このような勢力の存在が、植民地に関する政治的議論にのみ終始していた政党政治の政策のあり方に大きく影響を与えた。

また、米軍演習による市民の犠牲者を出したことで一挙に盛り上がったビエケスの反基地運動では、米国本土での経験が生み出したトランスナショナルの視点から多くの本土在住のプエルトリコ人がこの運動に呼応し、プエルトリコでは、政党と一線を画すフェミニズムの運動経験を経た多くの女性たちがビエケス住民の運動に参加し連帯した。この運動においては、ビエケスの住民である州制移行派の女性リーダーが活躍し、既存の政党組織を乗り越えた政治活動を女性たちが中心となって担った。これまで、伝統的に独立主義の者が反基地闘争を担う傾向があったが、ビエケスの問題では、プエルトリコの政治的地位をめぐる対立の混乱を招くことなく、幅広い支持のもとに米軍基地反対の運動を作り上げ、米軍基地撤退という結果を生み出した。これまでの植民地問題をめぐる政治的対立を考えると、州制移行派の組織する運動に独立主義者が参加することも考えにくいし、また、州制移行の住民が反基地というのも異質な気がするが、独立か州制かという政治的立場に問題の焦点を絞らず、基地弊害の解決、アメリカの隷属の状態からの解決という点に目標を設定することで、既成政党の枠組みを超えた運動が成立

した。ひとつの地域の安全をめぐる、これまでにない運動を作り上げたことは、やはり、それ以前の女性たちの政党間を乗り越えた運動の展開、米国本土で発生したトランスナショナリズムの動きが大きく影響していると考えられる。また、これらの女性たちの経験が植民地問題をめぐって対立してきた既成政党政治のあり方に変更を迫っていると言えよう。

## 5、結論：ナショナリズムとプエルトリコの女性たちの歴史、経験の記憶

プエルトリコの女性たちは、米国本土とプエルトリコで、それぞれ異なる環境と条件のもとによりよい生活を求めて日々奮闘している。それぞれが異なる課題と取り組んでいるが、ともに、女性の問題を具体的に解決する道筋を模索する過程で、既存の政治的枠組みのなかでは限界があることを認識し、新たな取り組みによる解決策を模索している点で共通している。

米国本土では、他のマイノリティ住民とともに生活改善に取り組み、他のラテン系女性グループとともに生活向上を目指した地域活動などを行い、マイノリティ女性間のトランスナショナルな連帯の経験を積んでいる。そのような経験のなかで形成されるナショナル・アイデンティティのもとでは、プエルトリコの政治的地位に関する問題に対する見解もプエルトリコのものとは微妙に異なり、結果的にプエルトリコの人々のナショナル・アイデンティティとナショナリズムの有り様に多様性をもたらしている。また、プエルトリコでは、女性たちは、女性問題の解決を求める女性たちのなかから党派主義の弊害を避けるために個別問題に活動の目標を絞った各グループが一つの利益課題に対して共闘するという従来見られなかった運動スタイルを生み出し、植民地問題を中心に対立を続けていたそれまでの既成政党政治のあり方に変更をもたらした。これらの両地域での女性たちの経験の積み重ねが、ビエケス島米軍基地反対闘争においても女性たちが中心となり、既成政党政治の枠組みを乗り越えた新しい共闘スタイルを生み出す力となった。そこには、これまで存在した独立か州か、といった植民地問題をめぐる対立を乗り越えて連帯するという新たな動きが作り出されている。それは、硬直化したこれまでの政治的発想では問題を解決できない、ということを示唆しているし、フェミニズムが既存の植民地問題を軸とした政治構造に対して、新たなパラダイムを提起しているこ

とを意味している。また、プエルトリコ社会のみならず、米国社会に対しても新たなパラダイムを提起していることも意味する。

トリンやアンサルドゥーアのポストコロニアル・フェミニズムは、フェミニズムの分裂を招き、フェミニズムの力を衰退させるものと危惧されることがときとしてある。だが、プエルトリコ女性たちの新しい取り組みは、プエルトリコ社会を分化させ、社会の統一を衰退させるものではなく、これまでの政治の枠組みの硬直化を解き崩し、より豊かな社会の実現へと導いている。プエルトリコ女性たちのケースは、周縁にあった者の視点が、新しい豊かな政治的勢力を生み出しているケースとして注目し得る。また、それが、これまでに支配的であった独立か州制移行かといった二者択一的なナショナリズムの様態にも変化を生み出している点も、脱植民地化が未完成の社会におけるナショナリズムの変容のケーススタディとして重要な視点を提供していると言える。

冒頭に、プエルトリコの詩人フリヤ・デ・ブルゴスの詩を引用した。フリヤは独立主義者として政治的な詩も多く、また、女性としての強い意志を示す多くの作品があり、現在でもフェミニストグループのパンフレットなどに頻繁に引用されている。ただし、フリヤの愛の詩がフェミニズムのなかで引用されたのを筆者は未だ目にしていない。だが、フリヤの愛の詩のなかには、男のニヒリズムや哲学を皮肉り、肉体を含めた生の輝く愛を男に訴える作品が多い。それは、フリヤの求める愛が男に理解されていなかったことを意味する。その是非はともかくとして、ここにも、男の司る言語表現のなかでは言葉にならない思いを表現したものが存在していよう。フリヤは、二人の間にあるものを、言葉ではない振動と表現している。そして、頭で考えるのではなく自分のことを体全体で受け止めて、と訴えている。それは、相手の思考の回路のなかには存在し得ない自分を何としてでも受け入れさせたいという切ない願いであったかもしれない。それが、周縁にある者の焦慮にも似て考えさせられるものがあるように思われる。

注

1) de Burgos, Julia, *El mar y tú*, Puerto Rico Printing

and Publishing Co., 1954, Puerto Rico, USA, pp.19-20, 拙訳。

- 2) トリン・T・ミンハ『女性・ネイティヴ・他者-ポストコロニアリズムとフェミニズム』岩波書店(1995/08第一刷、1999/1/14第四刷)p.2.
- 3) スピヴァク, G.C.『サバルタンは語るができるか』みすず書房 1998年第一刷 2003年第六刷 参照。
- 4) トリン, p.127.
- 5) スペンダー, D.『ことばは男が支配する:言語と性差』勁草書房 1987年第一刷 1994年第三刷 pp.157-158.
- 6) トリン, p.186.
- 7) Ibid., p.243.
- 8) Ibid., pp.244-245.
- 9) Moraga, Cherria, Anzaldua, Gloria, Eds., *This Bridge Called My Back: Writings Radical Women of Color, Kitchen Table: Women of Color Press, New York, USA, 1981, 1983.*
- 10) フックス, ベル『ブラックフェミニストの主張：周縁から中心へ』勁草書房 1997年 p.1.
- 11) Ibid., p.25.
- 12) 詳しくは 拙著「移民、政治、女性：米国本土におけるプエルトリコ人移民女性と政治」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第4巻第2号 岩手県立大学社会福祉学部 2002年 pp.9-18参照。
- 13) 拙著「アメリカ合衆国におけるプエルトリコ系移民社会の歴史的推移とアイデンティティの変容」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第3巻第2号 岩手県立大学社会福祉学部 2001年 pp.23-32。「エスニック・カルチャーの表象形態としての音楽：ニューヨークとヒスパニック」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第4巻第1号 岩手県立大学社会福祉学部 2001年 pp.11-18. "Transformation of National Identity Living in the US: the Case Study of the Puerto Rican Women in Chicago"『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第5巻第2号 岩手県立大学社会福祉学部 2003年 pp.27-34参照。
- 14) The Center for Latino, Latin American, and Caribbean Studies at the University at Albany, Director Edna Acosta-Belénとのインタビュー録画資料, 2001年9月, The Center for Latino, Latin American, and Caribbean Studies at the University at

Albanyにて録画, 筆者所有.

参考文献

- ・ Gloria, Anzaldua, *Borderlands: the new mestiza=La frontera*, Aunt Lute Books, San Francisco, USA, 1999.
- ・ 岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か』青土社 2000年第1刷 2002年第2刷.
- ・ 姜尚中『ポストコロニアリズム』作品社 2001年.
- ・ スピヴァク, G.C.『サバルタンは語ることができるか』みすず書房 1998年第1刷 2003年第6刷.
- ・ Spivak, Gayatri Chakravorty "Can the Subaltern Speak?" in: Cary Nelson and Lawrence and Grossberg, eds., *Marxism and the Interpretation of Culture*, Urbana, University of Illinois Press, USA, 1988.
- ・ スペンダー, D.『ことばは男が支配する:言語と性差』勁草書房 1987年第一刷 1994年第三刷.
- ・ Spender, Dale, *Man Made Language*, New York University Press, First published in 1980, Second edition published in 1985, Reprinted 2001, USA.
- ・ 竹村和子『ポストフェミニズム』作品社 2003年.
- ・ de Burgos, Julia, *El mar y tú*, Puerto Rico Printing and Publishing Co., 1954, Puerto Rico, USA.
- ・ フックス, ベル『ブラックフェミニストの主張:周縁から中心へ』勁草書房 1997年.
- ・ トリン, T.・ミンハ『女性・ネイティヴ・他者-ポストコロニアリズムとフェミニズム』岩波書店(1995/08第一刷、1999/1/14第四刷).
- ・ Moraga, Cherria, Anzaldua, Gloria, Eds., *This Bridge Called My Back: Writings Radical Women of Color*, Kitchen Table: Women of Color Press, New York, USA, 1981, 1983.
- ・ 三宅(志柿)禎子「第14章プエルトリコの新しい社会と女性」国本伊代編『ラテンアメリカ新しい社会と女性』新評論2000年.
- ・ \_\_\_\_\_「女性の権利に関する法整備と女性運動 - 1970年以降のプエルトリコにおける女性政策とフェミニズム」『言語と文化』岩手県立大学言語文化教育研究センター 2000年.
- ・ \_\_\_\_\_「プエルトリコにおけるドメスティック・バイオレンスとフェミニズム」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第2巻第2号 岩手県立大学社会福祉学部 2000年.
- ・ \_\_\_\_\_「アメリカ合衆国におけるプエルトリコ系移民社会の歴史的推移とアイデンティティの変容」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第3巻第2号 岩手県立大学社会福祉学部 2001年.
- ・ \_\_\_\_\_「エスニック・カルチャーの表象形態としての音楽:ニューヨークとヒスパニック」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第4巻第1号 岩手県立大学社会福祉学部 2001年.
- ・ \_\_\_\_\_「移民、政治、女性:米本土におけるプエルトリコ人移民女性と政治」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第4巻第2号 岩手県立大学社会福祉学部 2002年.
- ・ \_\_\_\_\_"Transformation of National Identity Living in the US: the Case Study of the Puerto Rican Women in Chicago"『岩手県立大学社会福祉学部紀要』第5巻第2号 岩手県立大学社会福祉学部 2003年.